

# 金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和五年五月一日発行 第一〇号

檀信徒の皆様こんにちは。境内のつつじの花々が穏やかに庫裏を照らし返していました。このような時は庫裏の建て替えに寂しさを覚えますが、今は前を向いて進んでいこうと思つていきます。

四月の講習会は「偉人に学ぶ」と題して二宮金次郎のお話を致しました。二宮金次郎は別名、二宮尊徳としても名高く、薪を背負いながら読書に励む勤労少年の像が一番に思い浮かぶのではないのでしょうか。金次郎は天明七年（一七八七年）、ペリー提督率いる黒船来航の六十六年前の生まれになります。この間、天明、天保の大飢饉があり、農作物の収穫が激減している時期ですが、金次郎を一言で言うと農政家です。

その施策は報徳思想に基づき行われた報徳仕法と呼ばれるものです。それは現代人が苦手な積小為大（毎日の小さな積み重ねが大きな成果につながる）といった考え方が根本にあるものの、がむしゃらに労働に努めるのではなく、物事に取り掛かるに際し、しっかりと分析し、効率的に取り組む経営者としての一面が、江戸時代の人物とは思えないほどに顕著です。手短かに説明をすると、①まごころを込めて取り組むこと（至誠）②一生懸命に働くこと（勤労）③収支を極めること（分度）

④上記から得た余剰を他人や社会貢献にも還元すること（推譲）です。この思想は次世代を担う渋沢栄一や豊田佐吉、松下幸之助などに多くの影響を与えました。私はこの時代に余剰を社会貢献に回すとの発想があつたということにも驚きました。

金次郎は極貧の幼少期を過ごしますが、没落した生家の立て直しを図り、見事に再興させ、村で一番の地主になります。その手腕を買われて小田原藩の家老、服部家の財政の再建を依頼され、遂行します。また時期を重ねて藩主、大久保忠真の懇願を受けて桜町領を立て直しにも取り組みこれも完遂するので、身分制度の厳しい時代に農民が藩士となつて、その指導に当たるとは本当に異例のことです。その後、金次郎は生前中に六百以上もの農村の再興事業を行います。私が一番感心したのは、それらの村々で金次郎に依存させるのではなく、村々が自立する為の政策を残していることです。有名どころでは、五常講と呼ばれる相互扶助の金利政策などがあります。これは西洋で同様の仕組みが生まれるよりも二十年前に取り組まれています。

もしも今の時代に二宮金次郎が生きていたら、その手腕を発揮して日本を救う政治家や実業家になっていないでしょうか。しかしながら施策などの方法は根底に思想と人間性がとても大切だということをつくづく

感じました。敢えてそれを一語で表すと「利他」の精神です。行き過ぎた資本主義にとつて大切なブレーキになるように感じています。当山記念事業の続報です。先月のお便りで詳細の見積もりが概算見積もりよりも四割ほど高かったことを皆様にもお伝えを致しました。その後、約三週間かけて見積もりの変更を行い、契約の目途が付きましたことをご報告致します。ただし、四月末からゴールデンウィークに入ってしまった、正式な契約には至っていません。五月初旬に総代会議を開き、承認を頂きましたら早々に佐伯建設さんと契約を結び、地鎮祭や庫裏の取り壊しに掛かり予定です。その間に宗祖弘法大師ご生誕千二百五十年記念法要が高野山であり、団体参拝で祖山にお参りに行ってまいります。奥の院への参拝も予定してまいりますので、そのご報告と無事安全に建立できますことを祈念してまいります。

この時期には総会が立て続きにあり、所属する仏教会や大分支所でも諸役を拝命致しました。これまでであれば、自坊の記念事業に専念するためにお断りを入れていたと思うのですが、「利他」あつてこそその「成就」を実行しようとして仰せつかりました。合掌

令和五年六月八日（木曜日）十四時より

金剛宝戒寺 本堂において

「法話の会」